土屋正義 編輯

繪本石山軍記

第三編

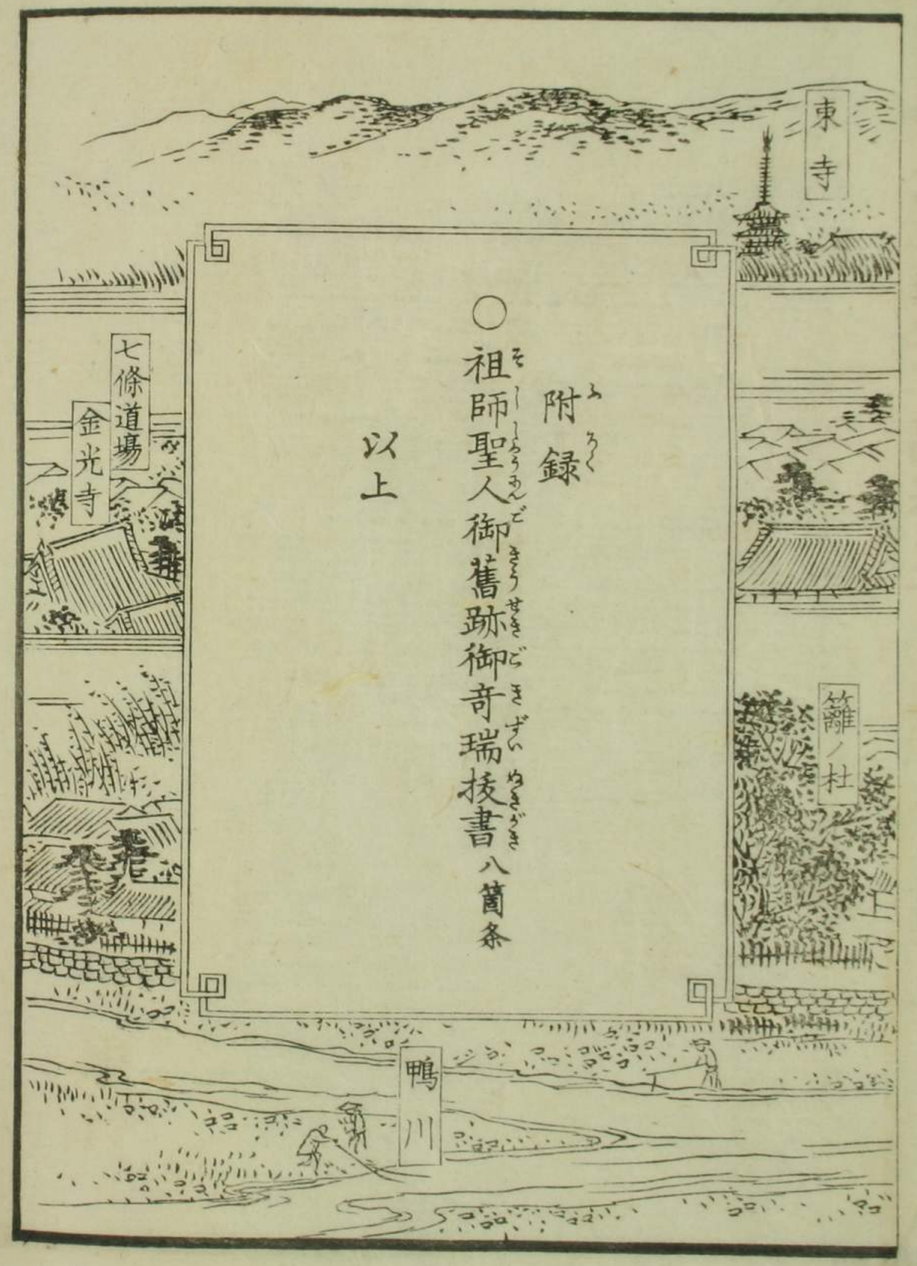
十

遠
2269
30 止

遠へ
2269
30

繪本石山軍記第三編巻之十目録

○本多正信君命ふ依て聖像を吟ふ
　並ニ鸞師東本願寺へ入佛
○信心厚薄の大畧
　並ニ雜行雜修の節季仕舞



附録

○祖師聖人御舊跡御奇瑞拔書八箇条

以上

繪本石山軍記第三編巻之十大尾

土屋正義 編輯

○本多正信君命に依て聖像を吟る 並びに鴛師東本願寺へ入佛去程に京都東六條本願寺堂舍普請滞なく落成す然りと雖も祖師聖人よりして相承有る本寺なれば御影堂に安置せらるべき聖人の御真影在さゞれば御影なくては門徒の信心薄くなんこと を思ひ召れ教如上人該粹に御煩慮有せられ東北二十四拜舊跡の中其他祖師御直弟の寺院より御直作聖像數多ありと雖も是 亦寺第一の御影ゆへに差上んと稟す者之なく依て此議得川家へ上聞に達し上の御計ひを願ひ給ふ家康公之を聞召給ひ賀何

様本寺に真影あくてハ宗門の目的薄うゞ〜関東予が領分の中にゝ門徒乃道場敷多有バ是等の寺院吟味を遂然るべき真影を乞求め寄附さすべ〜〜命せ〜ゞ〜老臣們へ下令給へバ中にも本多佐渡守正信ハ宗門殊に信仰の上教如上人と御入壊の間ふれバ一入周旋〜て尋ね索めぬ茲に上野國那波郡厩橋と云所に妙安寺と号る寺ありけり是ハ廿四拝の舊跡第六番の順拝所ふる下総國葵嶋郡妙安寺と云ハ祖師聖人の御直弟〜る成然御坊の舊跡なり此成然坊と稟せ〜人ハ俗性ハ京都九條家の御内にゝ中村基と稟せ〜貴族ふり承安年中事に罪せ〜ゞ〜下総國一の谷と云所へ配流せ〜る厥ち建保年中に到りて親鸞聖人常陸國茨城郡稲

田の郷に御勧化の砌彼首に行〜〜聞法あり〜〜ゞ聖人と〜ハ同流乃家譜ふるゆへ殊に双方愛情も厚く懇ろに御教化有〜る程〜〜随喜感歎〜て落髪有て御弟子〜〜ふり法名成然坊と改めぐ〜〜一の谷に帰りて一寺を建設〜是を妙安寺と号けらるゝ〜〜然るふ聖人御帰洛の節成然坊深く御別れを哭き悲〜〜願くバ師の御紀念〜〜て俺へ御壽像を賜ハり候すゞ有難く朝夕御給仕稟し度と御余波惜〜て願ハ〜〜ゞ聖人成然ゞ赤心を恤〜給ひ御自身の御像を彫刻まり〜而〜て成然坊へ曰ひ〜るハ會者ハ定つ〜離る〜效ひ皆夢幻の如き憂世ふしで予再び東に来らん縡有為無常乃玉緒覚束ふ〜該影像ハ親鸞心を留めて彫刻ふ〜〜る處ふれバ帰洛乃

後ハ俺を省るゝ思ひ死後にそ紀念ゝ思まゝ唯一心称名の声怠
りゝくハ親鸞へ乃最上供養ゝゝ命せ遣たさゝを給ひしゝハ成
然坊ハ感悦斜ゝゝ御寿像を頂戴ゝて供奉ゝ一の谷に帰り安置
ゝ奉り尊敬限りゝく侍きりるゝ聖人御遷化の後に到り愈大切ゝ
尊守致さゝを度々霊験顕ゝゝ給ふ御影ゝりゝに一の谷妙安寺退敗
に逮び同國三村ゝ云ふ所に造立有ゝゝ是も程ゝく退敗ゝて武刄川
越に於ゝく再建ゝ其後亦々上野廃橋に移住ゝ今下総猿嶋郡一の谷
乃妙安寺ゝ呼る道場ハ彼成然坊ゝ志願を追悼ゝ遺跡退轉無懸ゝ
りゝて有志の人乃執立ゝる所ゝゝり故に上刄廃橋妙安寺に聖人御自
作の御寿像此時まゝも持傳ゝる本多佐渡守之を聽出ゝ御

上聞にゝ逆ゝゝりゝ家康公ゝ由來を聞ゝ召し實々諸所歴
乃真影ゝゝ未ゝ本住の地を得らるゝ霊像ゝる綜明ゝゝり
全ゝ本寺新建乃時節を待洛ゝ帰らん奇瑞ゝるゝん一入得ゝき真
影ゝゝ東本願寺へ迎ゝ耻ゝゝ妙安寺も持傳へゝゝ諸方に移
轉ゝ所を定ゝ猶も地を替寺を替ゝ竟に真影乃徳を失ゝゝり今
本寺の尊像に獻進するハ妙安寺に把てハ時の手柄ゝり亦宗祖を
世に出す忠義ゝ謂べゝ肯ゝて此方へ指上ゝバ予格別の憐愍を相
へ介代りゝて寺退轉ゝき様宜ゝく執計ひ得さゝべゝゝ最御仁命
ゝる御上意下りて佐渡守ゝ老臣同ゝく藤左衛門を以ゝ廃橋妙安寺へ
趣ゝゝ上意の次第演ゝりゝゝバ妙安寺も武将の釣命ゝ謂殊に本寺

へ獻進せる影像をふかぐ大きに歡びて領承し寺寶の御真像を得
川公へ命に隨ひ獻りけゝ是に於て將軍家より改めて東本願寺教如
上人へ此尊像を寄附し給ひゝる頃ハ慶長七年壬寅十二月下旬數多
乃從者尊像を供奉し江戸表を啓行ありて京都東本願寺へ送らせ
ゝる最も洛へ御前達の沙汰有しゝば教如上人此旨御聽ありて甚ぐ御
滿足に思し召れ源君の御慈愛肝銘在し是併ふぐ〳〵祖師聖人の教
加を棄給ハざる者ゆゑんと信心膽に徹へ〳〵有難く迎請せずんバ勿躰
ふしてて御弟子數多召連らるゝ日取を枚へ〳〵御出迎あるに江刕草
津まで御越有ゝに早御真影も此驛に着給ふ教如上人三拜九拜
まし〳〵供奉して洛へ入せ給ふ道條拜見の男女老若七里の行程群集

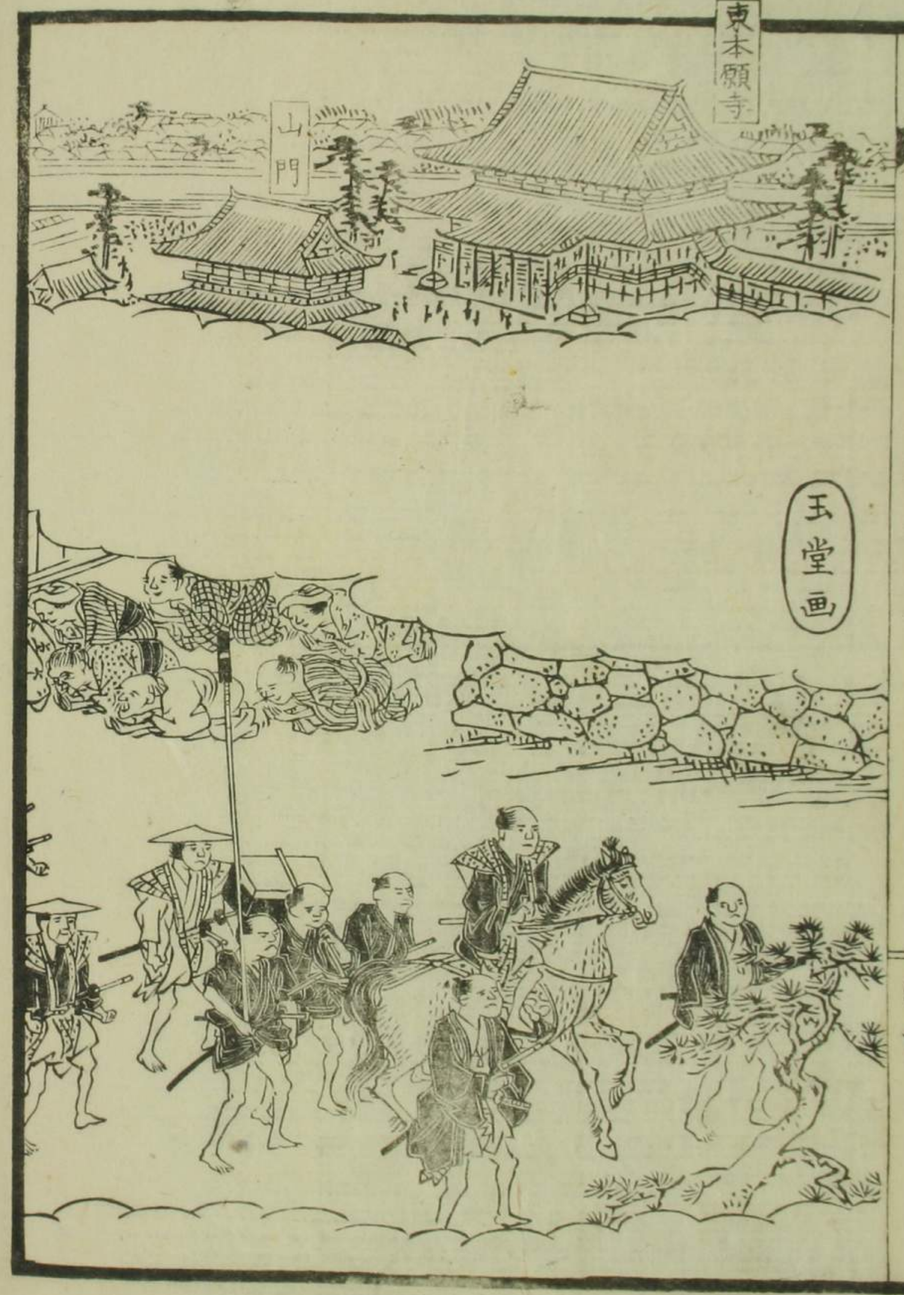
ふして口稱念佛の声絶間ふく在村ちゝめ都市の潤ひ不時の賑ひ
を蒙りに〳〵り時に道中に越年し給ひ明る慶長八年癸卯正月三日申
乃刻東本願寺に御入佛あり自夫日數一七日の間御法會を執行法
しくける今に東本願寺御影堂に赫然として拜まきさせ給ふ尊
くも成然へ授け給ひゝふ聖人御紀念の直作是ふり亦西六條本願
寺に於ても厥ち得川源君台命に依て東同様に御建立あり東西
嵬々として宗風四海に洽く御繁昌ふる縡諸宗の魁より斯く厥ち
教如上人ハ摂刄難波にく亦別に御堂御建立し給ふ准如上人ハ津村
云所小是も亦御堂御建立ありて今大阪船場の兩御堂と云ハ御兄弟
上人の建給ふ所ありゝ箇様に東西兩本寺と別ゝ縡偏に一向真宗の

繁昌乃基ひ末世不退轉の前表にして善巧方便の因縁あるべし凡往昔より世理を考へ察るに敵して相手の德を顯し逆ひて治世を甘んぜしむる人あり既り右府織田信長公ゆも元亀の元より天正十年まで石山本願寺を執念く敵とし年數十三ケ年の間攻戰し幾万乃門徒を屠殺ある縡唯尒宗門偏執乃謂ふり其暴悪門徒乃為しは實に虎狼の悪獸に魅らるる如く然ども佛智不思議の援助を以て鈴木ゞ黨石山に楯篭り能御門主を補佐し奉り籌策を巡し大敵を破りさしもに猛き織田乃強兵も數度打崩さゝて利軍を得ず是軍師重幸の謀支に託して全く佛菩薩の擁護を添へ給ふ不可思議の佛力と謂つべし善悪邪正ハ影乃形に隨ふ如し然バ釈尊の佛德を妬む提婆の甍も如來の妙力普く世に知せん方便と省バ守屋の皇太子に逆ふも佛法の德を世に示さん方便信長乃本願寺を攻亾さんと為も超世の宗門光輝令むる所村雲月を蔽ふ晴て光を増し寒暑盡して後冷暖の如く皆是善悪ハ天の配當道具ふり茲を以く能惟ミ世ぞ家の興廢運命の高拙も更に人力の所為に逮び難し世に善事ハ勉めても忘れ易く悪事ハ懲しても止難し故に他力本願の一向宗にハ十悪五逆の罪人ハ勿論ふり日夜悪業煩脳小泥む俺們の如き浅猿き者も余きず漏さん救ひ把く大光明の中に包むべしと四十八の大誓願を立給ふ弥陀一佛を願ハぎる門徒ハ尒宗門に在ふがらにも所謂佛敵法敵の類ひふり譬へバ悪を表にするハ罪軽く悪を

裏に包むハ罪深〳〵信長公の暴逆甚〳〵と雖も唯武将の威ひを表にする而已亡ぶるハ是自業自得ふり光秀の弑逆ハ陰謀陰悪ふり奚ぞ人之を免さゞらん光秀の主を恐むも非裏ふり非理非道の行状ゆへに顕如上人も憑に應ぜ〳〵ずず深く介悪逆を恐き給ひ教如上人乃御勸めに隨ひ數年信長〳〵の怨ミを轉心し秀吉の義軍に味方ある縡人望正實を表ハさる〳〵者ふり斯有難き御心操より〳〵て愈御宗門も李繁昌に廣ゞ東西両御本寺と成給ふ縡千載不朽の霊刹ふれハ両門派の諸人倍信心を凝〳〵高祖の御徳を仰くべき縡ふり

○信心厚薄の大畧　并びに雑行雑修の節季仕舞

聽衆群雑の中に於〳〵ハ愚痴丈育の男女も有て東西本願寺に差別有様心得違ひせ〳〵人も多くあり或いハ御表宗　西本願寺　御裏宗　東本願寺ふりと互に宗旨の威を諍ふ縡相撲取の勝負に力む如く脇目より視て〳〵片腹痛く實の信心とハ云ゞ〳〵ゞ然ハ蓮如上人乃御文章にも神明を輕んずゞ〳〵ず諸佛を卑しむゞ〳〵ずとあり況や同宗同流の中に於〳〵私の議論ハ悉皆制禁ふり其惑念の甚〳〵きに到〳〵ハ俺こそハ一向真宗の信者ふり神も諸佛も敬ふふ逮ずず産土神詣歳德空方参開帳参り彼岸参りなどハ是皆雑行ふりとて人に侈り笑ひ罵るハ浅猿〳〵き心底祖師の教へを聽間違ひふり諸の雑行雑修を振棄一向一心に念力撓まず弥陀佛を賴めと仰せ置る〳〵ハ諸佛菩薩を拜すゞ〳〵きぞ神を敬ふゞ〳〵にハ非


東本願寺
山門
玉堂画

京都七條烏丸の北に於て東本願寺の御堂成就に依て祖師の真像上州厩橋より入洛乃図
聖人真像

ず當流ハ然様の偏屈を宣ず何方へも詣り敬ふるきあり併し死期の一大事心乃取置ハ阿弥陀如來の外願ふ佛ホ〜雜行雜修を疑念より起るゆへ〜ふり諺へバ人を憑ミ躬を立んと欲ふに介心操篤實の人に依て談人を百事も便り〜為べき所を亦外より勸むる者有て你の力と思ふ人ハ甚ぐ綷迂遠〜何某こそ請込宜人ホり早く依頼〜給へ〜と咬せバ逆介傳り氣に成て心変り前に頼みる義理も忘れ竟に交加も甚ず疎縁に逮ぶ是武士にてハ反心の不忠者ふり箇様の人の癖〜〜てハ何日も一心轉倒〜て物仕課甚ず彼を憑此を憑する中にを時々刻々に老るを寄齢うろつき仕舞に一生を果〜人和を失ひ財に乏〜彼人ハ一心定めぬ意工地ホ〜と衆人の

眼舌に懸る時ハ老行先誰ら是を救ふべき原め篤實の人を憑ミ〜〜バ早まて身乃後楯とすべきを整已乃惑情に繊ままこ可惜丈人大丈夫の人を云ふを棄るに到る総じて人ハ信義厚く交るべ〜藝術職商覚ゆるにも一心の真實を励めバ〜そ妙德秘骨を自然と得る上表の修行稽古の業ハ乏賤ナしバ必ず止べ〜人を憑むも之に等く浮薄の信義ハ永く保〜ず俺ら〜飽ら向ふ疎むら故ゑ現世の憑ミも未來の憑ミも唯信義の虚實に得失あり況や逢難き弥陀乃悲願ら値偶〜得ぐき人界に生れるハ斯る尊き御法を聴聞〜火宅の苦脳を脱離ホ〜て極樂淨土に往生ホさでハ再び墮獄に沈むハ必定永劫人界へ出綷能ら ず後悔前に立ぬを知見〜給ハ自已乃

凡慮を誡しめんが為雑行雑修と示し給ふ然ども奈何弥陀佛を
頼めばとて諸佛を謾り他宗を謗る仕尓罪大いにして往生不定ふり
凡夫の躬に佛意を批判する人天に向て唾を吐が如く佛罰立地り尓
躬に復り變病變死の終を把或ひとも没落貧寒して食に飢竟に尓
行方も知ず成果る者多し中々安心起行の信に到ふず佛罰法謗乃
罪人あり此謂に阿弥陀佛を信ぜんと思ひ諸佛諸菩薩他宗を謗ず
現來二世の一大事を恐れく奈何も諸の悪事をせぬ様俗躰にて僧行を
學ぶを是を三心四修の行者と謂亦金剛の信獲得すとも云り唯俺
躬ハ愚ふる悪人と思ひ教主阿弥陀如來に携る時ハ十方諸佛乃誓
願にも協ふ綜阿弥陀經にも説給ふ如し然らバ悪業煩脳の凡夫こ

誹謗する人躬乃上知ずにて井の中乃蛙ほも劣るべし譬バ山野の鄙道
に踏惑ひく標示の杭建有しきハ行先速かに分る綜あれど片土人絶
乃道に到きバ道條二股三股に着綜あり何の道に往く宜らんやと
思ふ時杖を念じて眼を閉ぢ何卒俺志ざす方導し給へと突る
杖の掌下放して轉さる杖乃道へ蹶ぬ果して俺望む所へ到る者
ふり是則ち今世六途の辻にく杖ハ阿弥陀佛の同行ふり此謂り弥
陀ハ諸佛菩薩の壞り六字名號ハ一切經の要假令何方へ参詣ふすと
も念佛の廣德を打忘ずず雑行雑修の勧めに乗ず本心金剛力に打
固むれば地震に藪林ふ入が如く動ぐ氣遣ひとも有べしぼ依て此心
だふ放さぐりせと他宗の中に打交るとも大石内藏助の青楼這入

の如く滅多に仕損ひハ有まじきゆゑ別して念佛ハ闔宅和合ゝ
神咒にて且暮に之を信誦せゝる人ハ水火盜難流病熱病怪我不
時災難の憂を脫道嗔恚を鎭め妖魔を退け無事息災の祈禱と
ふ必ず實に不可思疑の佛力ハ筆紙に盡すべからざる妙德あり既
に念佛信誦の功力に於ゝハ前回ふ粗說著す如く鈴木豐人が歇中
囚ハ亦亦兒玉内藏助の鳴戸の大難名號信誦の一心に依ゝ各不可思
疑の奇瑞を蒙り必死の厄難脫遁さる縡全く未來計りの誓に非ず
福壽圓滿ふさしめ給べハ何をか雜行に惑ハざらん哉然バ君臣父子の禮
節にも先君の奉仕を前に勉め次ふ父母の方を勉め早る父母の親ゝ
深しゝ雖も主君を閣き親を訪バ主君を輕蔑するの非失あり息錄を

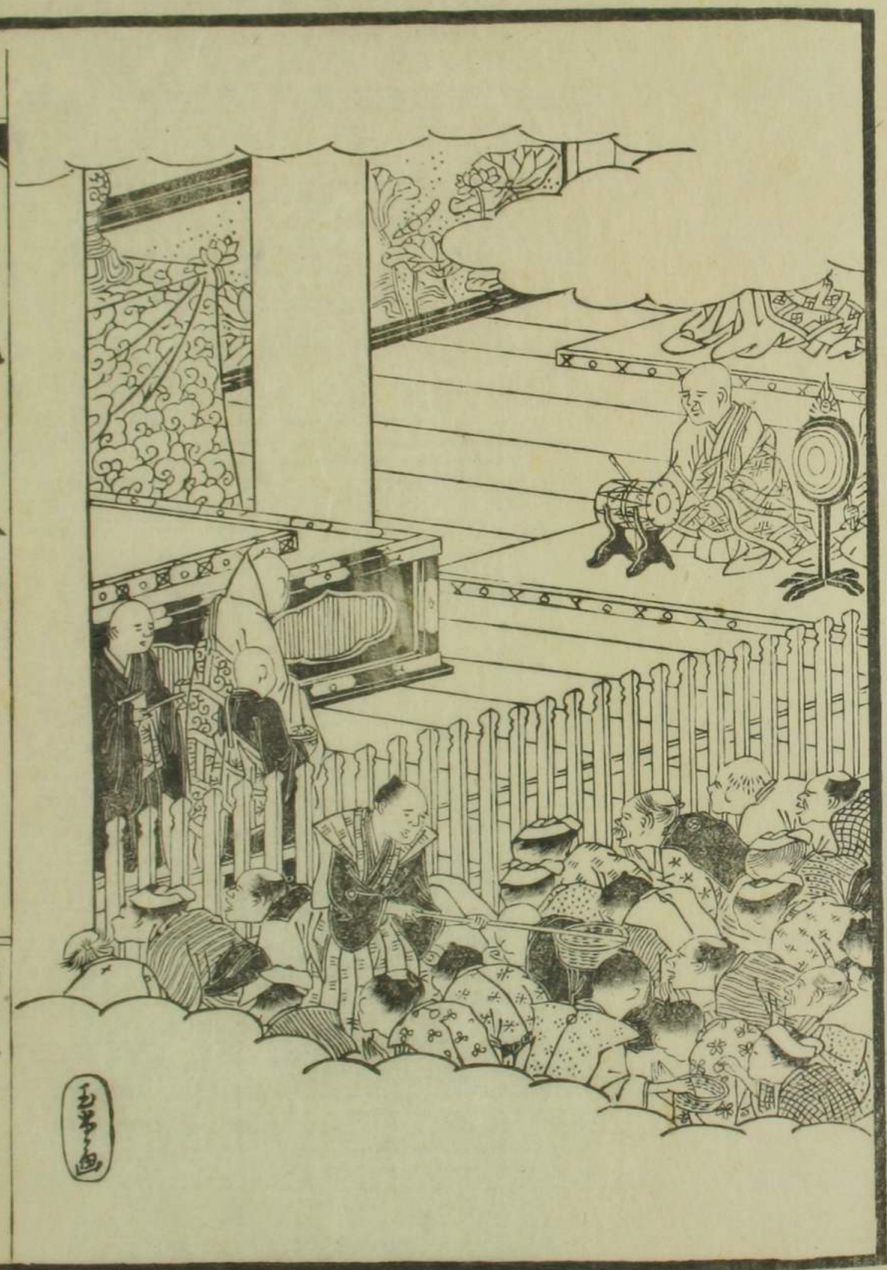
戴き眷族を蓄ふ德ハ是皆君の莫大乃賜物ゆゑ謂に俺宗門に比較
しても阿弥陀如來ハ御主君ゆゑ淨土を導き給ふハ恩祿ゆゑ諸佛菩
薩ハ尊々れども両親ゆれバ禮節遲く共主より先にゝハ宜ハず躬の勉
めさへ正しくすれバ佛菩薩の哀愍かゝる縡ゆゑ信心乃行者と讃嘆ま
りて極樂へ引接下さる縡確ゆゑ亦東西の本願寺に就て愚俗乃妄
說百般云立正信謁を拜誦するにも動が足ぬの溶がふいのかんとゝとの違
ひ有ゆゑ無益の議論を云諍ひ一廣乃信者顏の慢氣者ハ却ゝ念佛
唱ふハ疎きものゆゑ東西両本寺の御勸化ハ一ゆゑ親鸞聖人の弘通し
たまふ一宗時來つゝ後世に廣ゝ大閤と源君の御計ひふ愈繁昌鼓
舞せしめ給へバ更に門下の惑評把に足ず面々現來の一大事ゝ謂ハ唯

信の一字を打守りて業を励ら神佛を恭尊し六親の中實を失ふず
宗法に悖らず悪事を除き國法國禁を犯さずして人間日用の勤ごに
懈らずバ是を今世の極樂と思ひ逮だぬ望ミハ起すべからず抑八宗九
宗と別ると雖も其勧むる所ハ極樂報土へ到らしめん為の宗意ゆり
天台の極樂真言の極樂華嚴倶舎法相律禪法華浄土一向の極樂
おのゝ別土ハあらず介道把の多きゞ故に彼道ハ近りゝん此道ハ遠り
るべし船ゝや乗らん車にせんゆゑ不知道を利口立して案内者の
導きを用ひず他の道條より往ときにも嘗ず迷惑蒙昧して向ふへ
到ると能ハざる者ゆり其案内者と憑む人ハ一宗の祖師御代々
乃大教師ゆり各々宗旨々々の教導をゞ近道として同行を伴侶

危蹈氣あしに往ときハ夫々の祖師諸佛先達ゆり極樂に導き
たまふゝ心得て願ふ所を一向一心に帰命せば蹈惑ふこと有べからず
併し俺宗門ゆ帰依の余り他宗を嘲り罵るとゆゑハ法謗罪として
諸宗とも制禁ゆり誠心を以て脇より省ルバ無下に浅猿しき者ふ
きバ却て往生の節障とふるべし亦日本ハ神明の皇國ゆルバ先正直
を第一ゆ守りて神佛とも人にも信義を失ずず六根清浄ハ佛にも同
様ゆり和光同塵の誓を立て鎮り座す神々ゆルバ假令神明の前に
拜伏すゝ一向宗ハ念佛をゝゆふ万善万行乃功德ゆゆゆゞ
南無阿弥陀佛に憚るものゆし別隅をつくて忌嫌ひするハ皆ゆれ
凡夫の私しゝゆり佛法にゝ一佛一躰とゝへゞ念佛ハ神も御納

受在すべし然ハ深山樹に這ふ蔦蔓籬に縋る槿花までも世に自立すなきハ無のもり依て弥陀佛の他力本願に携るハ神佛とも総願の六字名號その儀小違ひ信用ふかんバ何方へ詣りくらとも感應あし倩人生乃長短を考察するに信力堅固ふるは根氣もありく繻を仕遂て長壽すべし信力薄きハ疑惑に縅まき生涯屈々として名を做ふしかく持命も随ふく短し是をもつく省ぶぞ信ハ神之神のとく動ぜざる人ハ念望全く貫徹ふして現來二世を助るべしとおもふ浮生の光陰ハ時々刻々に消く疇昔ハ過去今日ハ現在翌ハ定めがたき未來ぞう是則ち三界を表するふり現在の果をバ観悟して過去未來を察しいつり或ひと一月より十二月まで一年をもつて

現世に象り家職を出精し弊を省き道を守りて稼ぐときは瀬戸の大晦日を越るに懸乞の向ふ風の難ふく一月の港に着岸して祝ふ是善人信者の往生素懐ふり未來の春を安樂に暮す繻去年の働らき烈しきゆへふり亦毎も大どんくく乃ぶくく心得家業も空々しく懈りがちに酒色に荒く徒食に遊歩し過今乃奢侈に烏を送るハ臨終際の大晦日にて甚ぞ苦脳して目を白黒し講釈場噺し小家ふぐの出養生を企つくいつぐも借錢乃穴の吐瀉しにハ治まり兼さる家賃し米代質屋の種も置盡せば頼母子の幽霊を羨くて一夜その躬も消さき心地ふを本願の家業を守らず不精放埒の雑行雑修に晦日の往生際とり損ふく三世浮く得ざるに表



京都六條の
御堂へ遠近
の門徒群詣
する図

すゝゆり余ハ之に準じて悟るべし〳〵両本願寺〳〵も武将の御建立超世不退轉の要宗ホハ無智蒙昧の凡下乃輩ハ右や左議論云隙あ〳〵バ報恩謝德ホ心を傾け一向專修に名号稱へ〳〵今ろも知ね露の命乃翌の旅路同行ホ唯南無阿弥陀佛と呼子鳥如來乃塒に歸らぐんバ何日の烏何日乃時をゝ期すべゝん究賢々々

附録祖師聖人御舊跡御奇瑞抜書

○越前國坂井郡寄安村　道場　縁起書の儘摸出す

承元元卯年聖人越後御流罪の路次此里に後家長者と云る者あり三日御逗留乃中に十字の名号を賜ふ御菓子に黄楊の楊枝を添て棒ぐ聖人是を取〳〵佛智不思議の誓をふし其地に指給ふ其御楊枝一家の内に茂り今に此所を黄楊堂と名づく聖人三十五歳の御時ゝ云々

○數珠掛櫻由来畧縁起　寺記の儘出す

越後國蒲原郡白川庄小島村

抑數珠掛櫻乃濫觴を尋ぬるに頃ハ人皇八十三代土御門院の御宇

承元元年丁卯三月高祖聖人三十五歳の御時越後の國府へ御流罪の御躬〻成せ給ひ五年の居諸を經給ふに建暦元年辛未十一月中旬岡崎中納言範光卿勅免の御使ひ〻〻て同國國府の浦に下らせ給ふ此〻き聖人衆群化益の為沼垂郡今津の庄鳥屋野の里に御逗留乃折〻〻近郷御徑廻在ぬし給ふ〻き小島村佐五助と云者の茅屋に御宿を乞せ給ひしに主の夫婦免して〻り其夜末代出離の要法超世弘願の信心を御述させ給ふに遠劫の宿縁忽ちに熟し曠劫以来乃罪已に滅し其願空しかざる事を示し給ふ頃〻小島乃弊屋を御出立の砌り御手に持せ給ふ御數珠を往還の櫻ふかけ我弘むる御法偽りふくんバ英數珠の如くふんと日ひしに不思議ふる哉此櫻木御誓乃言葉に随順し花薄紅ひにして數珠の房を懸さるまゝ〻今に到りて昭々然るも是偏に宗祖聖人の御威德末代我等ゲ凡愚直入淨刹の亀鑑として遺し給へる御遺跡あれバ御門徒〻るべき者此櫻木を拜し称名怠慢あく如来大悲の御恩を報じ且祖師聖人の御高德謝せずんバ有ざるべし

○越後國沼垂郡鳥屋野院畧縁起　寺記の儘摸出す

抑鳥屋野院ハ宗祖聖人三年行化の尊跡にして其由來を尋ね奉るに頃〻承元元年流罪の宣旨を蒙り同国々府に配せらるゝ給へり自夫猶此地に趣〻せ給ひ〻〻他力摂生の旨を御示しあり〻〻雖も初処ハ邪見放逸のともがら〻孤疑の惑ひを懐き却〻誹謗の者多くして

信順の人甚ぞ罕ありけまバ機縁未ぞ到らざる事を深く悲嘆に
思ー召せ〻ま御迹懐の余り一首乃御歌に
此里に親の死ーる子ハ無きゝ御法の風に靡く人ゝし
と詠ゞ給ふ愚惑の凡夫に疑ひを晴させんが為にて聖人常に
持給へる竹の杖を地に指給ひ願ーて曰く我弘むる法佛意に叶
ゝぐ此枯竹再び根芽を生ずべーと果ーて誓の如く根芽を生
ド年を経る儘に筍を恵ゝ當時ハ四方に繁榮す是機感相
應ー利益普きゞ致す所あり今に繁茂せり
佛閣其跡ゝは一塁も生ぜず諸人尊ゝ奉るものありゝ書記ー
給へり又人皇八十四代順徳天皇御幸在ー地あり即ち御製に

翦ぐゝ此鳥屋野の浅茅踏ゝけて已とゝる秋乃うゝ人
未申の方に御装束の塚あり丑寅の方に御庭乃泉水池御馬繋乃
榎あり中院大納言通知卿舊古の霊跡を思ー召さ〻ゝて
世々に猶殘す光ハ志ゝ雪の鳥屋野の里乃名ゝそゝりぬ
千種正三位有功卿の御歌に
艸に木ゝ今ハふゝゝし此里の竹のゝゝ此法のゝる風
其外古歌多くあり覺如上人蓮如上人達如上人の御代ゝは尊跡
拜覧在ー感涙を交へ給へりゝ云々委ーくハ遺徳記及古裏書等
の諸傳ゝ記せり云ゝ

○越後國蒲原郡保田の郷孝順寺霊寶舊跡畧縁起　世に云三度栗の事跡あり

抑當寺の靈寶舊跡の旨を示さバ往昔祖師聖人承元二年の春越後國へ御下向ありて頭城郡國府と云所に二年の御滞留遊バさるゝ自夫同國沼垂郡鳥屋野の里に御來入遊バして此所に三年の春秋を送り給ふ自夫保田の里に暫く御化導の御杖を止めさせふ九ゝる爰嵯峨天皇の後胤河原の左大臣源の融十二代の末孫渡邉源吾綱より九代乃子孫に渡邉播磨治郎源の競と云ふ侍あり源三位頼政の家臣あり〻〻治承四年宇治の戰ひに主從とも打死す依之渡邉ゞ妻子便る方なく泣々越後國へ落魄し保田の郷に菴を結ぶ然バ建暦二年の春先祖の忌日に當り追福を營む砌り聖人濟凡度生の御衣を翻し通り給ふ彼老女聖人の尊容を拜し奉るに身の毛戰き出く

思ひ走り出て聖人に向ひ御慈悲を以て貧家へ御入下さるべしと願ひ給ふバ聖人奇特に思し召て老女が家に入り御教訓在ゝまバ老女宿縁到來〻〻歡喜の涙を出し稱名を唱へ喜び限りなし幸に燒栗を捧げ奉れバ聖人之を受給ふ老女重ねて申し上る樣ハかく罪深き障りの重き女人も南無阿弥陀佛を信じ稱ふる計りにて未來ハ永く淨土に往生を遂ぐゝ季乃世の御紀念に御筆を染給ハれと〻尺余の布を裁て奉るに聖人則ち六字名號を御書老女より與へ給ふ自夫聖人上野が原へ行せられ御袖より燒栗を取出し仰せに曰く我勸むる弥陀乃本願末世に繁昌致さバ此所に根芽を生じて一年に三度花咲實あるべし葉ハ一葉の中に二葉に分れて繁茂

せとゝ宜ふ言下に栗忽ち根芽を生じて今に繁茂す倩此不思議を思ふに年に三度實のる事ハ弥陀の御誓ひ第十八願の至心信樂欲生我國の三信を置し一枚の葉二枚に分る事ハ光明〻名号乃二ッを以て十方の衆生を教化し給ふ理りなるべし焼さる栗二度根芽を生る事ハ謗法闡提回心皆往の御利益を見せ給ふ御詠歌ハ

一年に三度御法を通ハせて心保田に残す焼ぐり

奇ふる哉其后老女が一子出家して専念房と云其頃孝順寺と寺号を蒙り三度栗今に孝順寺の什物と残し給ふ是三國布施乃化導尓功大ひ成るを宜成るか

○越後國蒲原郡小島村梅護庵八房梅

御旧跡畧縁起

寺記の儘を摸出す

高祖聖人越後乃國府に五箇年の間御化益在せし折柄或日曉陰り逮び蒲原郡白川の庄小島村佐五助と云る民屋に宿し給ひ主の夫婦を教化在せしに立地ふ直入淨刹の信心を受得せしに依て御喜悦の余り十字の名号を御染筆遊ばし夫婦の者に賜ふ〻〻きバ愈崇敬し奉り御逗留數日に逮び〻るうち塩に漬さる梅を供御の數ゝ捧げ奉るに聖人梅乃實を取て宜て未代の凡愚弥陀の本願を信ず参らせ淨土往生疑ひ無んバ花一輪に八ッの實を結んで李の世に榮へ凡夫往生の證據とかれよと一首の歌を御詠吟在す

後乃世に暫しの為に残し置弥陀頼む身の便りとも哉

梅の實を庭前に植給ふに不思議や枝葉四方に繁り英八重にして色紅ひふり一輪に八ツの實を結ぶ故に世に傳へ〻八房の梅と名〻是偏〻末代の御門葉淨土往生乃御證跡ふかバ御門下〻るべき者尊敬せずんバ有ざ〻らず仰ぐべ〻信ずべ〻

○越後國蒲原郡田上村西養寺　寺記の儘模出す

繫椎畧縁起

抑當山繫椎の由緒ハ祖師聖人當國五箇年御逗留の時分護摩山の城主宮崎但馬守宿縁深くや有々ん聖人の御教化に歸依〻二心ふりき或時城中に屈請〻奉り叮嚀に饗應尊敬比ふひ〻御菓子に此山の名産繫き椎を上るに聖人御掌に三粒を取給ひて御前の衆人に對〻て曰く我孔むる真宗乃教法釋迦諸佛の御心〻り相叶ひ末世凡夫淨土往生疑ひふくバ汝の貫きたる椎頃に枝葉を生ずべ〻と前庭に投給へ〻一夜の中に忽ち出生〻枝葉青々〻〻して果實を結ぶに到つ〻繫きたる穴ありて粒小現ちまち聖人御手の裏の椎に少〻も違ちず見聞乃諸人奇異の思ひをふし疑謗乃輩まぐ〻も信を生ず不思議ふる事あり宮崎氏制〻て伐事勿れ折〻勿れ〻椎の木を重んじけるとゝや世乃盛衰定まりふく宮崎氏も程ふく建武の亂まに没落〻城跡空〻〻群獸の栖〻成〻〻〻唯繫椎の霊木扨〻安全に殘りて障りふ〻まバ貴賤其德を慕ひ古へを思ひ〻敬ひ〻遥の光陰を經〻諸人參詣乃便り

を思ひ當寺の門徒田上の里に移〳〵植るに枝葉益盛に榮ふ是偏に真宗繁昌の瑞相あ〳〵ん〵遠近の道俗歩みを運び高祖の威德を仰ぎ報謝の志〳〵を抽んで拜禮〳〵奉る者あり

高祖聖人御詠歌に

我跡を慕ふく來いよ繫榧御法の糸を通共一すじ

▲越後國新浮より旧跡廻り道法

小島 ハツ房ノ梅 「一リ 水原 「二リ 保田 三度栗ノ 「三リ 新津 炊の角より此所山中に有所あり 亀田 「一リ 小杉 「一リ 余 黒瀬 「一リ

火ノ出所あり又畫夜油の湧所あり但〳〵釜の湯の 「三リ 羽生田 「一リ 湯田上

にへかゑるゞ〳〵〳〵宿より案内をたのむべし

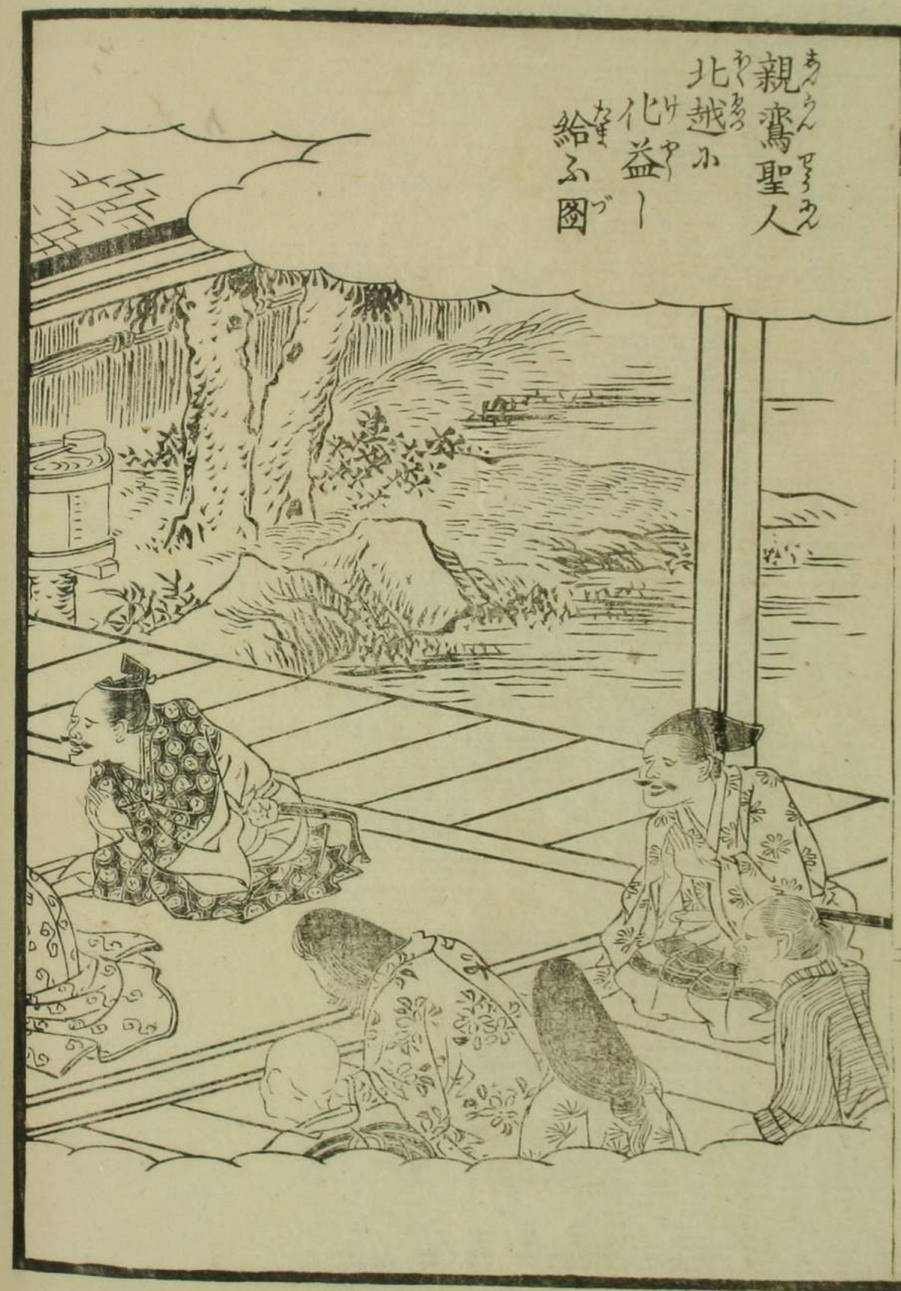
「一リ 田上 右つゞきゞや

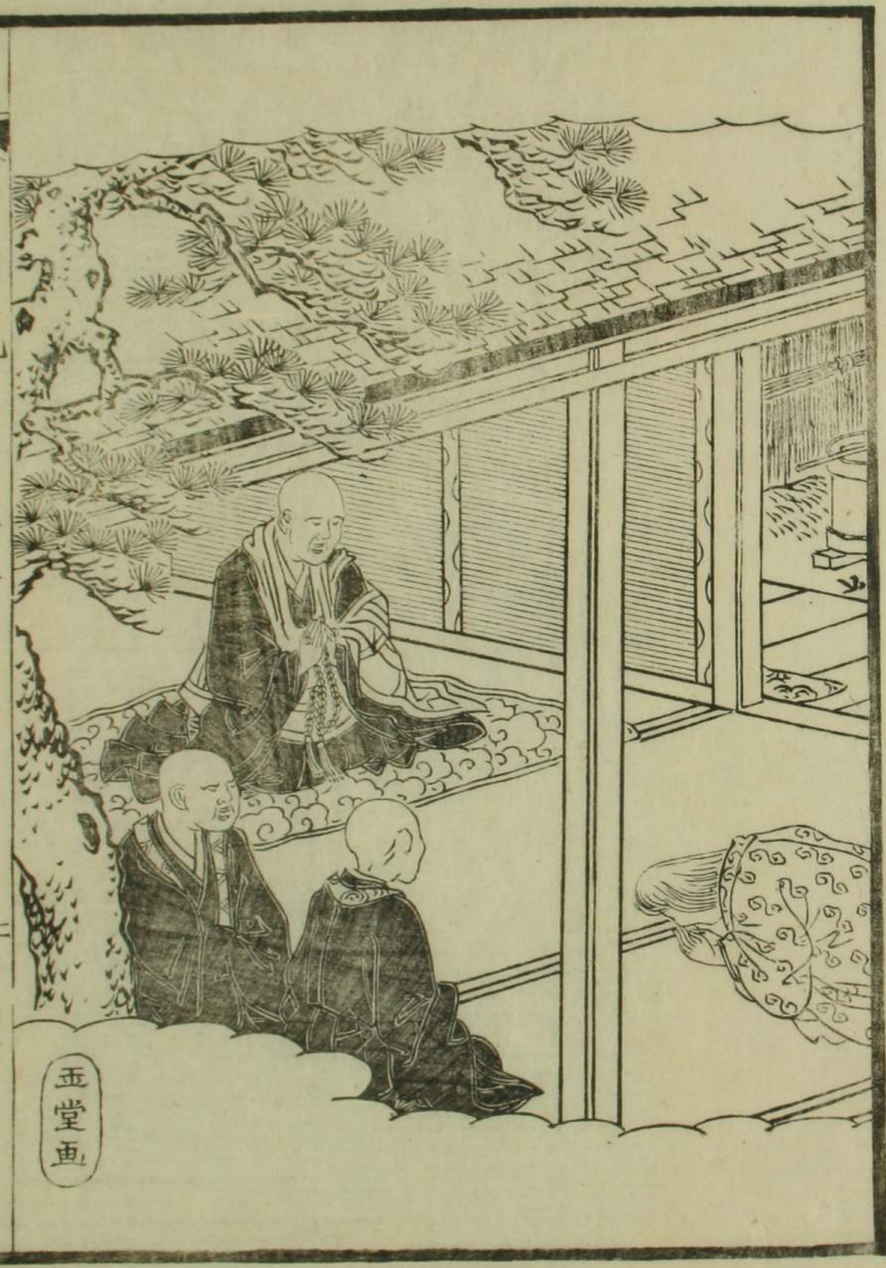
○越後國蒲原郡平島鈴木新十郎へ賜ふ

川越名号の略縁起

縁起の儘摸出す

正面御厨子乃中に安置〳〵奉るハ祖師聖人の御真筆川越の御名号あり其由來を委〳〵尋ぬるに御年二十九歳にして法然聖人乃吉水の禪房を尋ねたゝひ則ち上足の御弟子となり專ら易行他力の要法を御弘めあ〳〵せられたるゞ終に南都北嶺の妬みにより三十五才にして御流罪の御身と成せられ住馴〳〵花乃都を後にふ〳〵遥に遠き越後國寂〳〵き鄙へ下り給ひ鳥屋野に於て三年の春秋を送り給ふ他力念佛の一法を御弘め遊ぎさきをくゞ其化を受〳〵者教〳〵を受るのもが〳〵門前に市をなし〳〵るゞ茲小於て平島新十郎宿縁の催ふ〳〵にや深く聖人ふ


親鸞聖人
北越ふ
化益し
給ふ図


玉堂画

歸依し奉り明暮烏屋野へ參詣〻〻聖人の御教化を蒙り無二の信者と成々るゞ其後聖人関東へ趣き給ふ砌り新十郎深く御別れを悲〻〻川端まで御後を慕ひ猶御余波を惜み奉りぬ聖人其志ざしを察し給ひ然らば紀念を與ふゞと汝ぢ夫に〻紙を開きて待ゞ〻と聖人川の彼方に在て御筆を轉じさまふに不思議ふるゝれ川を隔て白紙に六字の名号現れ給ふ新十郎感涙肝小銘じ夫より子孫代々大切小安置し奉りける然るに安永年中の頃何國ともなく一人の僧来り給ひ御名号拝禮をとゞげ何卒御表具を御成替下されゝ〻金子差出されけるが故に色々辭退に逮ぶと雖も止事を得ざれバ其志しに應じ其僧乃脊姿を見送りゝるに四五丁余り行すぎて忽示〻〻て消失し給ふ其後度々盗難に御逢ひふさゝと雖も正しき夢乃御告ありて不日に御帰り有せゝれ是亦不思議の一固あり然ゝば則ち祖師聖人の御真筆川越の御名号と申す事誠に以て明らかなり是併しなゞ〻新十郎一人の御附屬にあゞび末代の御流きを汲念佛の同行へ逮ゞ〻ての御慈悲なれバ各々一人々々の御紀念と存ぜゝき称名諸〻も大切り禮拝を遂らるゝとよろ

○玉日君御遺状　常陸城郡　稲田禪坊什寶　寺記の儘模出す

我身事前日より何〻やん心悪くい病ひハ死のなりにいへ〻

一入御慈悲の程さのみ〳〵はいと定めて身乃終りと存じ紀念迄
たゝに書残しは誠に凡夫のあゝひなきバ憂事多くはべ〳〵斯
る身ながらこそ諸々の佛菩薩も見放されはを弥陀佛の救ひ給ハ
んとて此身一人の往生をかけものにあきらを正覚あゝせ給ふハ如
來の御姿こそ我等ゞ往生の疑ひなき證〳〵にて御座〳〵へば必
ず〳〵御過失有きゝ〳〵悪き心が起りはつ愈尊〳〵称名勇みさ
ゆふべくは是より外ハ身の悦び之なくは親鸞の仰せも外の事は
とゞ計ハゞ唯御恩を歓ぶ計りには別ふ珍〳〵き事はなく永き御
別きと存じは御信心にかゝりあき人々ハ浄土にて蓮の對面申
すべくはなし

九月十六日　尼惠信

友だちの人々へ

五日の君ハ祖師聖人の御室ゆり聖人御帰洛の〳〵き御落髪あ
りて法名惠信と改め稲田に止り給ひ弘長三年九月十八日御禪
坊に於て御往生在せり其時御紀念に書遺し給ふ御遺言の御
書なり

御禪坊施板

猶此外祖師御舊跡御奇瑞の實説條々數百ヶ條有〳〵雖も茲
にハ唯介一二の旧跡を載て信者の高覧に備ふ而已省略乃分は
恕し給へ〳〵乞

繪本石山軍記第三編巻之十 大尾

東西兩本願寺来由

繪本石山軍記

土屋正義編述　松川半山画

初編 十冊出版
二編 十冊出版
三編 十冊嗣刻

此書ハ本願寺證鸞より第八代蓮如上人自ら聖人の子の義を繼
ぎ給ひ法を子の孫に授け給ふ事を初め生玉の莊内石山堂と号
刻り織田信長此地の要害を見て本願寺を退け城郭を築かんと願
ふ上人と十余年の戰爭ありて本願寺の衆徒と雖も幸ひの
亂織田の大軍孤城の計を以て駆討ち攻め給ふ時上人の孫
義昭公人危殆九死の名号の毒陰根本の密策血戰討死相繼
の英智を尊と敬して小清水の義淀川に入れ
勅命を伝へ給ふ所の上人石山を出て紀州雑賀へ退き住給ふ
之を改る時に迷ひ給ふ光秀本願寺に於て信長を殺し奉る

森の家を敗亡に於ては孫い跡を踏ぐ跳踊を為吉中國の名を此大義と爾毛利と和陸し孤城を山陰の一戦に光義を元に其場所人臨て森と出て白鳥川に陣営を造営ありて住めり敵人人家の屋子長坂の人人東西ふ名て寄せ陣を遂に築をるの時本多の山中より侵伐ありて石垣山の後士怪力強武の門注号太石を運び孫ふ者孔寺孔某を偏ふ他力本願の意備本多ふ引り益に策へ宿せ隔て後の者ども迷ふ石山合戦ふ揚る美談を限ら長著を

出版人

大阪府下南久寶寺町四丁目

前川善兵衛

軍書小説類藏板目錄　大坂心齋橋通南久寶寺町　伊丹屋善兵衛

源平盛衰記　片假名　廿五冊

後太平記　片假名　廿五冊

殘太平記　同　十二冊

四國軍記（一名土佐軍記）　同　十二冊

駿臺雜話　平かな　五冊

室鳩巣翁の著述ふ為て仁義の大意を論て鬼神の説和漢古今名將勇士の言行を評し治乱の要諭仏法和歌詩文の得失老儒の見あり

續武將感狀記　同　十冊

聖德太子傳圖會　平かな　六冊

楠正行戰功圖會　平かな　十一冊

畫本西遊全傳　四十冊

太田道灌雄飛錄　左衛門大夫太田持資入道道灌三位政綱の後裔なり上杉氏の世臣なり文武の英才を兼ね聯ざ一世の戦功忠義を委くゆ

繪本玉藻譚　五冊

同白狐傳（一名赤ゝ物語）　十冊

復讐石見英雄録　全部　五十冊

此書三編まとめ作者各替まつり四編以下廿九冊
ハ宮の孝筆にて記せり石見氏をもて通編
説話の主人公こそ初編にて田氏の滅亡の五傑と
称せる雲士の悲しきに作者の新案を費せり
惣篇の復讐を主題に作者の新案を費せり
七編ハ結局にて謎詩の一巻あり八冊をもて一部とす

刀筆青砥碑　八冊

此書ハ水戸藩の孫亭子の原稿を曲亭翁の
筆削せしものなり而の秘ハ医人名著刺糸法
を賢妻能孫と殺一殺も奸夫偽三郎を賺して
盗賊くと謀まりて殺さんとせしを青砥藤綱が
明敏各その罪を照して懲せる復讐妙案なり

同　霊鏡談　十二冊

同　二嶋英雄記　十冊

同　彦山霊験記　十冊

同　亀山話　十冊

同　合邦辻　十冊

同　浅艸霊験記　十冊

繪本金花談　十二冊

世俗のひとく伝ふる安珍の安奈と清姫とを
ねんごろに作せるまき紙なり

蛍火窓の八雲

下野国足利開闢主義兵の都長平山帝国
忠臣遠藤の子新平左衛門が妖術妖怪夕顔
が忠孝を面白く真平左衛門

同　金毘羅神霊記　十冊

同　誠忠傳　十冊

同　孝感傳　十冊

同　顕勇録　十冊

同　奇縁傳　十冊

同　忠孝美善録　十冊

同　伊賀越孝勇傳　七冊

鎌倉年代圖會　五冊

鎌倉の源氏の創業ハ宗教の下に
まもりまして故に将軍家五代の間の祈願を表
くあるべ

鎌倉大樹家譜　五冊

宗教の親王鎌倉ハ幕府の
悪の為雄北條が一門亡びて後醍醐帝天下を
平定ーあるべ

武蔵坊辨慶異傳　十冊

源平の中が水滸伝の面目を摸て変化きる
親向あれば甚興あるべ

大内多々羅軍記　六冊

大内義隆の孫者陶晴賢良武佐
毋智浪人服部を跟ふ陶れそ妻を君に進

檀之二葉　六冊

なる妖婦生駒の方が陶尾張守晴賢が大悪逆など正史に出へせる面白き稗史なり

近江縣物語　五冊

花山院の御代なりし頃坂上梅丸が全傳にして盗賊藤原保輔奇術を以て残暴を極め安世が女園生が貞操安世が非常なる邪慾勝嘉のために梅丸もともに流浪し終に照光翁に諭されて賊徒征伐の大将軍藤原保昌を助けて賊を平らげ終に近江掾に進み生の父母に逢ひ住居する其その文の妙なること閲して知るべし

昔語松虫墳　六冊

延武の頃清水寺に詣でし野田太郎清忠が武勇妹桂子なる継母が奸臣安井隼太が悪計に思ふ世田勝美蔵里なる世田の家臣木津源八が妻松女が狂死木津源太郎が弥嶋の遊女柏木が孝心松虫墳紐塚などの由来をしるす

奥州小白川の石塚某が三五郎といふ者の千田民弥を殺して松田伊織に斬れ田夫婦と民弥が妻民孫が義理民弥が庶子民五郎といふ童に憑て復讐させしことを録せり

北野霊験 **二葉の梅**　六冊

鎌倉の豪賊池上七九郎が兇悪の事孝子菊女と上田某二郎が復讐の小説にして悪少年岩見三之丞が義侠の老人に教訓なするなどを綴りあはせり

報怨珠話 **十かえり花**　六冊

建久年中出羽の山縣の郷士常盤井内記が義則が二男鷹二郎が奥人に仙郷に誘れて数年の後年諸事を助けて父の仇を山伏山に討ちて仙女去来見し昇天なる奇談奇事をしるせり

今昔二枚繪草紙　六冊

天文の頃さらしな浦の三木の城主別所長宗の忠臣藤崎何某が武勇の松三郎左衛門が奸悪ますます高村の義気などの絶る詐術を爽あり

矢口總評 新田功臣 **忠孝貞婦傳**　六冊

大庭伊織信澄八般田殿右傍門が為計に中られて自害し妻の里見と家臣某田則助が忠勇にて寃を雪ぎし事あり

復讐千丈松　七冊

近江の松井遊斎浪人藤村大蔵に欺かれ主君両人共年家を窺ひ青柳佐市と藤村が阿波の藤村にて志を遂し傳へ

忠孝人龍傳　五冊

犬家外傳 **弥生佐久羅**　六冊

犬家の良臣恩地左近が忠孝弥生の佐倉源八佐倉の夫車が桐の家の伴が服部と敵討の奴を除く人の中なる橋道の悪田宗の奇談に松本宗なる騎柳に大勝の雑兵八重雷帝丸が誠忠源八後の兄弟をしるす

骨董新話 **花標因縁車**　五冊

小幡平太隆が小金を奪ひて逃る小頓悩の常念法師が忍手の霊の羽嶋と帝に経くも

玉搔頭　五冊

三毛の猫の子を主として高井土の呉服屋十兵衛の上方にて手技にて二面の金を抱りて踊猫針に縁なり亀田の話

南部栗忠孝記　五冊
敵討
金屋金右衛門全傳　五冊
輪廻物語　五冊
長崎聞見録　五冊
理齋隨筆　六冊
風流茶人氣質　五冊

明治十六年八月十八日版權免許
同　年十二月　出版

編輯人　静岡縣士族　土屋正義
大阪府下北區紅梅町八番地寄留

出版人　大阪府平民　前川善兵衛
同府下東區南久寶寺町四丁目八番地